

スポーツにおける競争性（競争と本能）

○ 千葉工業大学 相川量平
土屋正則

スポーツにおける競争心は勝利志向の意識が過剰になると、しばしば闘争的、攻撃的となる。攻撃は欲求不満や妨害に対するの怒りとしての情動にあらわれる場合が多いので、短絡的に闘争、攻撃本能として暴力や戦闘の準備行為と結びつけられる。闘争や攻撃は自己の優越性を得ようとする競争心であり、刺激に対する反応としてあらわれるから、社会的、環境的条件によってあらわれ方は異なり、条件によっては強化される。マクドゥガルのように闘争を本能とする心理学者もいるが、現在は闘争や攻撃は本能的なものではないとされている。確かに、下等動物には攻撃的衝動のような本能の証拠が示されるが、人間の攻撃が本能的性質であるという証拠はほとんどない。むしろ、それはわれわれ競争社会では合法化されたものであろうとしている。すなわち、従来闘争や攻撃は本能とされていたが、生得的な欲求でないことは動物実験でも明らかにされている。また、ベネディクトによると、アメリカ北西海岸に住むクワキトウル族には富や権力獲得、誇示の態度がみられ、競争、攻撃などが生活の基本原則となっており、ニューメキシコのズーニ族には他を排して優者になろうとする競争意欲は全くなく、平静、誠実、中庸が生活の原理となっている。ミードによるとニューギニアのムンドワモール族は育児には無関心であり、互いに攻撃的、非協同的で残酷さや尊大さが基本的な生活態度となっている。この報告によると、ベネディクトは生活の基本原則としての勝利志向が競争心を生み出す可能性があるとしており、ミードは育児様式の放任や拒否の構えが非協同的競争心の温床であるとしているが、競争心の現われ方はそこに生活する人々の伝統的、社会的態度と文化の在り方によって規定されるといえる。

このように闘争や攻撃は本能的なものではなく、社会的、文化的な環境条件に規定されて現われる

が、それはあらゆる社会生活のなかにみられるものであり、時代や社会的条件によって異なる。闘争や攻撃は不可避的な普遍現象であるとして、これが社会を結合発展させる基本原理であって進歩のために不可欠の手段であるとされている。確かに人間には闘争や攻撃と共に協同や調和の要素も存在しており、競争社会において闘争や攻撃は重要な役割をもっているが、それはルールを守り、秩序を高める基本的な態度によって成り立っているのである。しかし、現実的にはスポーツの場にコマーシャルイズムが現われたり、ナショナリズムが台頭し、民族的イデオロギーや政治性の影響が強大となって種々の混乱を巻き起こし、オリンピックの存在やスポーツの本質が問われるような事態となっている。

南博は社会心理学の立場から、攻撃の欲求を全然もたない人間ばかりの社会を教育や道徳の力だけで作り出すことは難かしく、一つの社会のなかに階級的対立があり、国家と国家の間にも国際的対立がある限り不可能で、攻撃の欲求をなくするにはこうした対立をなくして社会の条件をよくする以外、どんなに心理学の枠のなかだけで考えても解決できないとしている。また、フロイドは文化の発達を戦争を防ぐ唯一の希望であるとしているが、スポーツの場合も同様であって、民族や国家間の対立や抗争が解決しない以上、オリンピック等の国際大会での混乱は避けることはできないであろう。

東龍太郎は特殊な選手のみを国家代表の戦士の如くするとすれば、それは国家的対戦の場であって選手は奇型児を生み、友好五輪は戦闘の場であり、もはやスポーツではないとしているが、まさに現在の国際級の選手はナショナリズムを背景に強化養成の体制に選ばれ、つくられたショーにおけるスター的存在といえよう。これは国民体育大会での郷土愛の名のもとにつくられる選手の場合

も同じことがいえる。

オリンピックの理想を虚構のものとしないうためには、スポーツの近代社会における固有の文化性を高揚し共通の理解を深める努力と政治性からの脱皮が必要であろう。そのためにはコマーシャルイズムの断絶とアマチュアリズムの近代的対応と、経済的独立体制の確立が強く望まれる点である。また、N・O・Cは本来民間団体が組織すべきなのに、近年では新興独立国が多くなったこともあり、国家が直接管理するところが増えてきた。梅村光弘は国内における政治権力からの自由を獲得すること、また国際社会におけるスーパーパワーからの自由を確保する、つまり国際的にナショナリズムのくびきを断つことを実現しなければならないとしているが、具体化の困難性を訴えている。人類共通の文化財としての大会を守り、理想実現に近づくためには多くの困難な問題が山積しているが、スポーツの原点にかえり、フロイドの言うように、スポーツの文化性、すなわち、スポーツと生活、社会との結びつきから見直していく必要がある。

るたほこびーホス

既述の如く、近代社会における固有の文化性を高揚し共通の理解を深める努力と政治性からの脱皮が必要であろう。そのためにはコマーシャルイズムの断絶とアマチュアリズムの近代的対応と、経済的独立体制の確立が強く望まれる点である。また、N・O・Cは本来民間団体が組織すべきなのに、近年では新興独立国が多くなったこともあり、国家が直接管理するところが増えてきた。梅村光弘は国内における政治権力からの自由を獲得すること、また国際社会におけるスーパーパワーからの自由を確保する、つまり国際的にナショナリズムのくびきを断つことを実現しなければならないとしているが、具体化の困難性を訴えている。人類共通の文化財としての大会を守り、理想実現に近づくためには多くの困難な問題が山積しているが、スポーツの原点にかえり、フロイドの言うように、スポーツの文化性、すなわち、スポーツと生活、社会との結びつきから見直していく必要がある。